

聖書：使徒 19：1～20

説教題：主のことばは驚くほど広まり

日時：2014年5月25日

いよいよパウロはアジア州最大の都市エペソへと入ります。彼はそこで幾人かの弟子に会います。しかし彼らと話し合っている内に、何かが足りないと感じたのでしょう。そこで「信じたとき、聖霊を受けましたか。」と尋ねます。するとその人々は「いいえ、聖霊の与えられることは、聞きもしませんでした。」と答えました。そこでパウロは「では、どんなバプテスマを受けたのですか。」と問うと、彼らは「ヨハネのバプテスマです。」と答えました。これを読んで、私たちは直前のアポロとの関連を思わされます。エペソに来たばかりのアポロも最初はヨハネのバプテスマしか知りませんでした。こうした記事が続くことによって、このエペソは正しい福音がまだ十分に宣べ伝えられていない地であったことが示されています。しかしアポロと今回の弟子たちには違いがありました。アポロはヨハネのバプテスマしか知らなかったとは言われていましたが、それでもイエスのことを知り、イエスのことを正確に語っていました。それに対して19章に出て来た人々は、イエス様に対する信仰を持っていなかったようです。4節でパウロは「ヨハネは、自分のあとに来られるイエスを信じるように人々に告げて、悔い改めのバプテスマを授けたのです。」と教えています。つまり彼らの信仰は主イエスに結びついていなかった。そういう意味でアポロはクリスチャンであったのに対し、こちらの人たちはクリスチャンではなかったと言えます。彼らは特にヨハネに結び付いた弟子たちであった。そこでパウロはヨハネのバプテスマはイエスへの信仰へ導かれるためのものであることを説明し、ここで福音を語ったと思われる。そして彼らが主イエスの御名によってバプテスマを受けた時、聖霊が初めて彼らの上に臨み、彼らは異言を語ったり、預言をしたりしました。こうした記事がパウロのエペソ伝道に先だって記されている意義は何でしょうか。それは先に触れたように、いかにこのアジアの最大都市エペソが福音の光にまだ十分に照らされていない状態であったかを明らかにすることでしょう。またここで聖霊の異常な現象が現れたのは、このエペソにもいよいよ聖霊の働きが本格的に臨む時がやって来たことを示すものであったと思われる。これまでエルサレム、サマリヤ、カイザリヤで独特な聖霊の注ぎが起きました。それらはそれぞれユダヤ人、サマリヤ人、異邦人の上に同じ聖霊が注がれたことを目に見える形ではっきり示すユニークな出来事でした。その聖霊の独特な現れが、この遠く離れた異国の地エペソでも起こったのです。

さて、こうしてエペソに入ったパウロは本格的に伝道を開始します。そしてここでの宣教は豊かに祝福されます。最後の20節に「こうして、主のことばは驚くほど広まり、ますます力強くなって行った。」とまとめられるほどです。このようにエペソ伝道が祝された背景にはどんなことがあったのでしょうか。三つのことを見て行きたいと思います。

第一は聖書の御言葉が熱心に語られ、また聞かれたということです。私たちはつい後半の出来事に目を奪われますが、そのあまり、まず御言葉がしっかりと語られ、しっかりと聞かれていたという地道な活動の重要性を見落としてはならないと思います。パウロはいつもの通り、まず

会堂に入って神の国について宣教します。この会堂での宣教は他の土地での宣教よりも良かったようです。3ヵ月間、そこでの宣教は続きました。しかしエペソの会堂もパウロの安住の場所とはなりません。結局、反抗する人たちが出て来て、パウロは拠点を移さなければなりません。そして彼が見出した場所は「ツラノの講堂」でした。ツラノとは専制君主とか暴君という意味です。また講堂と訳されている言葉スコレーはスクールすなわち学校と関係する言葉です。おそらくここは生徒たちから鬼のような先生と呼ばれるような熱血教師が教えていた学校あるいは会館のようなところだったのでしょう。

この場所をよく借りられたものだという点については、しばしば以下のことが言われます。この地方では日中がとてもし暑くて勉強や仕事に適さないため、人々は朝早くと夕方に活動する習慣があったそうです。具体的には午前11時まで働いて、それ以後は昼休みとなり、その後は涼しくなる夕方から再び活動を始めた。その昼休みの誰も使わない時間に、パウロはツラノの講堂を借りたということです。ある写本にはその時間帯にパウロはツラノの講堂で論じたと記されてあるそうです。だとしたら、普通の人は昼寝をしている時間に、パウロは福音宣教をしていたことになります。また話す人がいたなら聞く人たちもいたわけで、その人々は他の時間帯は仕事をしながら、この一番眠たくなる時間にツラノの講堂にやって来てパウロのメッセージを聞いたことになります。ですから語る方も聞く方も寸暇を惜しんでみことばに没頭した。人々の活動がすべて一旦停止する真昼間に、ツラノの講堂だけは熱気にあふれていたということになります。実際にどうであってにせよ、パウロは毎日、このツラノの講堂で論じました。そしてこの地道かつ熱心な取り組みは2年間に及びました。この結果、10節にあるように、アジアに住む者はみな、ユダヤ人もギリシヤ人も主のこことばを聞いたのです。この地方に属するコロサイ、ヒエラポリス、ラオデキヤなどに教会が建てられたのはこの時だったのでしょう。また黙示録に出て来るアジアの7つの教会、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィアなどの教会が建設されたのもこの頃だったのでしょう。

エペソ伝道が祝された二つ目の理由は、みことばの宣教を支える驚くべき奇跡が行なわれたことです。11～12節：「神はパウロの手によって驚くべき奇跡を行なわれた。パウロの身に着けている手ぬぐいや前掛けをはずして病人に当てると、その病気は去り、悪霊は出て行った。」新約聖書が完結していない時代は、語られたみことばが確かに神からのものであることを実証する一つの手段として奇跡が行なわれました。それにしても今回の奇跡は特に「驚くべき奇跡」と言われています。なぜそのような奇跡が行われたのか。それはエペソの町がアルテミスの神を祭り、世界七不思議の一つの舞台であったように、魔法、占い、オカルトといった類が盛んであったからでしょう。そういった特別な異教的雰囲気の中で、神の国の力がはっきり示されるために、これらの特別な奇跡が行なわれたのだと思われまます。

さて、この奇跡の効果をさらに高めたのはユダヤ人の魔よけ祈祷師たちでした。彼らはパウロの奇跡を見て色めき立ち、自分たちも同じことをしてみたいと考えます。そしてその秘訣はイエス・キリストという名にあるらしいとつかみ、「イエスによって命じる」と悪霊に向かってやってみます。しかしそれは悲惨な結果を身に招くことになりました。悪霊は「自分はイエスを知っているし、パウロもよく知っている。けれどおまえたちは何者だ。」と言って彼らに

とびかかり、彼らを打ち負かします。その結果、魔よけ祈祷師たちは裸にされ、傷を負って、その家を逃げ出さなければならなくなりました。17節：「このことがエペソに住むユダヤ人とギリシヤ人の全部に知れ渡ったので、みな恐れを感じて、主イエスの御名をあがめるようになった。」

エペソ伝道が祝されるに至った第3の理由は、今まで見て来た二つのことに基づいて、悔い改めのリバイバルが人々の間に起こったことです。18～19節：「そして、信仰に入った人たちの中から多くの者がやって来て、自分たちのしていることをさらけ出して告白した。また魔術を行っていた多くの者が、その書物をかかえて来て、みなの前で焼き捨てた。その値段を合計してみると、銀貨五万枚になった。」まず人々がしたことは、罪の公の告白です。彼らは私的に、プライベートに罪を告白するだけでは満足しませんでした。これまでの罪深い生活とぎっぱり縁を切るために、人々の前に出て来て、それを告白したのです。そしてこれとセットだったことは、魔術を行っていた多くの者が、その書物をかかえて来て、みなの前で焼き捨てたことです。当時の書物は今日と違って非常に高価でした。羊皮紙やパピルスに書かれていて、私たちが想像する以上に貴重なものでした。それは高いお金を払ってやっと手に入れたものだったでしょう。しかし今や価値観が全く変わった彼らにとって、それらの本は何の価値もないもの、いや手元に置くだけマイナスとなるものになってしまった。彼らはとにかくこれまでの罪の生活と決別したいと願ったのです。これらの本を手元に残しておくことは誘惑を自分のそばに置いておくことであって、それを捨てることによって逆戻りする道を断ち切りたいと願ったのでしょう。こうして焼き捨てられた書物の合計は、銀貨にして約5万枚分であったとルカは述べています。これは135年分の給料に相当するとある注解者は述べています。大変な金額です！

私たちはこの捨てたものを見るなら、もったいないという気持ちもわいて来そうになりますが、この結果、彼らは何を代わりに得たのかということにこそ思いを向けるべきでしょう。彼らは捨てたもの以上のものを得たのではなかったのでしょうか。彼らはそれと引き換えに心からの平安と喜びを頂いたはずですが、彼らはパウロや他の人から、それらを捨てるようにと強制されたわけではありません。彼らは誰かに知られているわけではなかったのに、自発的にそれらを持って来て焼き捨てました。つまり彼らの心の良心は、神の前にふさわしくないものを持っただけでいいのだろうかという心の責めを感じていた。しかし今やそれらとこうしてお別れできた。このことは彼らの心をどんなに晴れやかにしたか、分かりません。あれだけのお金をかけ、また他の人にもばれないように一生懸命だったことが一体何だったのか、と思う後悔の念も持ったでしょうが、彼らはそれ以上にそれらを捨てたことから来る心の晴れ晴れとした状態、束縛から解放された自由な心、生まれ変わったようなすがすがしさを頂いたのではないのでしょうか。だからこそ、20節にあるように、主のことばは驚くほど広まり、ますます力強くなって行ったのではないのでしょうか。

私たちが最後に心に留めたいことは、エペソの人々はこのように行ないましたが、私たちにも同じようにすることはないだろうかということです。私たちは19節を見て、「何ということか。人々はこれほどのものを隠し持っていたのか。」と言うのでしょうか。しかし私たちは自分

を偽って、他人事のように驚くことはできません。これは私たちにも当てはまることではないでしょうか。このことはクリスチャンの中にも捨てるべきものが残されているのであり、私たちが気付かされるたびに、それらを捨てて行く必要があるということを語っているのではないのでしょうか。彼らにとってそれは魔術の本だったかもしれませんが、私たちにとっては何でしょうか。私たちの祈りを妨げるほどに私たちを強く引きつけているものはないのでしょうか。神の御心にかなわないと思いつつ、ひそかに自分のもとに保持しているものはないのでしょうか。あるいは「もの」でなくても、私たち自身の内にあるある性質が捨てられなければならないかもしれません。正しくない気づいていながら、それと縁を切らず、相変わらず保ち続けている習慣、考え方、態度はないのでしょうか。それらをきっぱりと捨てることは、この世の価値観で言えば、銀貨5万枚を失うことかもしれません。しかしそれをする時に、私たちはそれを保ち続けることにはるかに勝る心の満たしと祝福を頂くことになるのです。そしてその私を通して、福音はさらに力強く周りに拡がって行くことになるのです。私たちは今日の御言葉から、パウロのように、福音を粘り強く、熱心に、地道に語り続けることを学ぶと共に、自らがこの福音の光に照らされて聖められる喜びに生かされることを祈り求めたいと思います。そうして福音の力と祝福を、私自身の生活を持って証しし、福音のための歩みをささげたいと思います。「こうして、主のことは驚くほど広まり、ますます力強くなって行った」という祝福が私たちの地でも起こることを祈り求めつつ。